与野党対決 高まる関心

鈴木氏、石川氏 一騎打ちへ

佐藤氏不出馬

4月の道知事選は26日、フリーキャスターの佐藤のりゆき氏(69)が不出馬を発表したことにより、自民、公明両党推薦の鈴木直道夕張市長(37)と、立憲民主党など野党が連携して推す石川知裕元衆院議員(45)による一騎打ちの構図がほぼ固まった。同じく新人対決だった16年前は候補が乱立したが、今回は政党主導型の選挙となる。北海道新聞社の世論調査では、知事選への関心の高さが鮮明となっており、無党派層を引きつける政策を打ち出せるかどうかが注目される。(1面参照)

無党派層の流れ注視

「運動資金や人手も限りある中で、強大な組織相手に立ち向かうには、今の環境は私に味方していない」。佐藤氏は26日に発表した文書で、政党に推された鈴木、石川両氏との戦いの難しさを強調した。前回2015年知事選では野党統一候補として出馬し、約115万票を獲得。しかし今回、佐藤氏を支援する政党はなく、立候補を要請した市民団体などに限られていた。

立憲民主党内では「佐藤氏が出馬して三つどもえになれば、支持層が重なる石川氏の票が奪われかねない」(道連幹部)との懸念があっただけに、安堵(あんど)感も広がる。党道連の市橋修治幹事長は「中央依存の道政からの脱却を訴え、野党、市民が一致協力して戦いに臨みたい」と話した。

このほかに意欲を示していた政治経済評論家の徳川家広氏(54)も20日に不出馬を表明。自民党道連の小畑保則幹事長は「まずは経済界を含めて保守票をまとめていく。あとは無党派層など裾野をどこまで広められるかが勝負だ」と語った。

現職の高橋はるみ知事が初出馬した03年の知事選は、元民主党衆院議員の鉢呂吉雄氏や元道副知事の磯田憲一氏、元衆院議員で弁護士の伊東秀子氏、元道議会議長の酒井芳秀氏ら候補9人による激戦となった。候補擁立過程で与野党が混乱した今回も、関係者の間では「チャンスありとみて、また乱立になるのでは」との見方があった。

国内外の政党政治を研究する北大大学院の橋本努教授(政治社会学)は、03年知事選について「改革を断行した小泉政権下で自民党が揺れ、野党も相互に調整する能力がなかった時代。知事選もその影響を受けたのでは」と分析する。今回の構図については「安倍政権下で自民党が政治力を持ち、無党派から新人が出にくくなっている。野党各党が国政選挙で成功例のある共闘の動きを強め、一本化したことも大きい」とみている。

(村田亮、中村征太郎、小林史明)

チェンジ 新知事選択

本社世論調査

争点は「社会保障」「雇用」

北海道新聞社が23、24日に行った全道世論調査で、知事選の最大の争点(単数回答)を尋ねたところ、「医療・介護・福祉など社会保障政策」が30%と最も多く、「景気・雇用・産業振興」が29%と拮抗した。

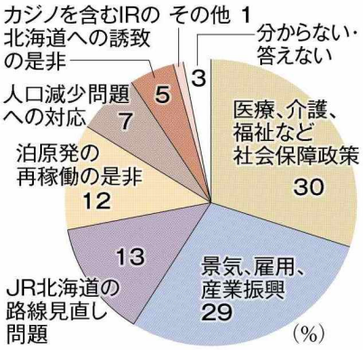
社会保障政策と産業振興に次いで多かったのは、「JR北海道の路線見直し問題」が13%、「北海道電力泊原子力発電所の再稼働の是非」が12%。地方で深刻化する「人口減少問題への対応」は7%、高橋はるみ知事が新知事に判断を委ねた「カジノを含む統合型リゾート(IR)の北海道への誘致の是非」は5%だった。

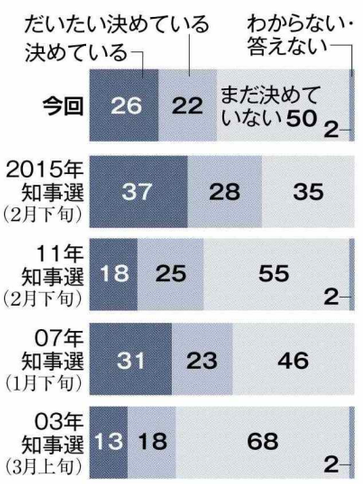
年代別では、医療や介護の問題に直面している70代以上の4割が社会保障政策を最大の争点とした。働き盛り世代の30代以下、40代、50代は景気・雇用対策が最多。その間に当たる60代は社会保障、景気・雇用がほぼ同率だった。性別では、男性は景気・雇用対策、女性は社会保障政策が最も多かった。

管内別にみると、JR北海道が廃止・バス転換の意向を示す日高線鵡川―様似間がある胆振・日高管内は、路線見直し問題が31%で最も高かった。道内経済中心地の札幌市は景気・雇用対策が39%を占め、全体平均を10ポイント上回った。

支持政党別では、自民党支持層が景気・雇用対策、立憲民主党支持層や「支持政党なし」は社会保障政策がともに最多だった。

知事選に出馬表明した鈴木直道夕張市長(37)と石川知裕元衆院議員(45)は、ともに公約を発表していない。





高橋道政「支持」60%

北海道新聞社の全道世論調査で、高橋はるみ知事の道政運営の評価を聞いたところ、「大変良い」「まあ良い」を合わせた支持派は、昨年4月の前回調査より7ポイント減の60%だった。

支持派の内訳は「大変良い」が前回比2ポイント減の12%、「まあ良い」が同5ポイント減の48%。「不支持派」は同4ポイント減の13%で、内訳は「まったく良くない」が前回と同数の4%、「あまり良くない」が同4ポイント減の9%。「どちらとも言えない」は同9ポイント増の26%だった。

支持派は女性が64%と、男性の56%を8ポイント上回った。年代別では50代で支持派が7割台に上った。